

松浦ファーム

松浦 直人さん

朝倉市・久留米市／就農2年目

工業畑の自分にはBLOF理論は
面白いと感じ、深い興味を
持ちました

将来は子どもを主眼とした
食品会社を立ち上げたい

前職ではシステムエンジニアをしていた松浦さん。配偶者の実家の家業に役員として参画するため、福岡市に移住。それまで食に無頓着であった松浦さんでしたが、子供の誕生をきっかけに食の大切さに気づくように。コロナ禍でリモートワークをする中、野菜中心の規則正しい食生活に切り替えると松浦さん自身の体にも変化が。一方、子どもにはなるべく農薬を使用していない野菜を食べて欲しいものの、簡単に入手できない現状を知り、さらに、ヨーロッパでは農業が国防につながると認識されていることに共感した松浦さんは、自ら農業を始めることを決意。

その後AGSAの存在を知り、OBから話を聞く中で、BLOF理論に対し「工業畑の自分にとって理論が面白い」「再現性がある方法である」と深い興味を持ち

ました。8期生として学んだ後、朝倉市内に農地を確保し、2022年に就農。その後、久留米市内の農地（水田）も確保。農地は、AGSA2期生の生産者や、地元で30年以上有機栽培の米づくりに取り組む生産者の人脈を通じて確保しました。また、松浦さん家族も久留米市に転居しました。

松浦ファーム

栽培品目:野菜(露地)、水稻
経営面積:約1.4 ha(野菜40a、水稻1ha)
販路:直売所、レストラン、

SNSを通じた直接販売

AGSAサポートスタッフ

Instagram

https://www.instagram.com/matsuura_farming/



有機栽培の実践

就農当初は、多品目の野菜を栽培。昨年（令和5年）は、初めて行う水稲作（品種：ヒノヒカリ）に専念するため、夏場は野菜の栽培を行わず土づくりに専念し、冬から主ににんじんを栽培しています。このほか、ニンニク、西洋野菜も栽培。

野菜、水稲の栽培では、BLOF理論に基づき、堆肥（有機質資材）の施用と太陽熱養生処理（野菜）による物理性・生物性の改善、堆肥と有機肥料によるアミノ酸の補給、土壌分析・施肥設計に基づくミネラルの補給を実践。また、水稲作では、田植機による作業は知り合いや販売メーカー等に教えてもらい

ながら、松浦さん自ら行いました（コンバインによる収穫作業は知り合いに委託）。現在、稲刈りを終えた水田では、収穫後すぐにわらをすき込み土づくりの最中です。

また、AGSAのプロジェクトとして、除草・抑草を目的とした微生物資材の散布と機械除草の試験にも参画しています。



西洋野菜を栽培している畑

経営面の取組・工夫

畑（40a）と水田（1ha）は、基本、松浦さん一人で管理。農薬や化学肥料、除草剤を使わずに栽培。

営農に必要な機械は、これまで自費で購入してきましたが、稲作用機械・設備は一式そろえると高額な出費となることから、田植え機は知り合いの仲介で中古品を購入、収穫、乾燥調製作業は委託。育苗は作業を含めて松浦さんに水田を紹介した生産者に依頼しました。

生産した農産物は、松浦さんが正組合員として加入するJAの直売所のほか、西洋野菜を中心にレストランに販売。顧客の開拓にSNSも活用。

また、にんじんは、レモンと混ぜ合わせてジュースに加工（委託製造）し、SNS等を通じて販売。昨

年製造した商品は、一般的な市販品に比べて高価格（4400円/2本(720 ml)）ながらも、販売開始から1か月で、製造した200本を完売しました。

さらに、松浦さんは、システムエンジニアのスキルを活かし、AGSAのサポートスタッフとしても活動しています。



JAの直売所で販売しているにんじん

（写真は松浦ファーム提供）

今後の展開

松浦さんは、今後ともBLOF理論を基本に生産を行う方針です。AGSAの活動も引き続きサポートしていく考えです。

経営の面では、現在は手洗いをしている、にんじんの洗浄作業の機械化、また、現在2か所（久留米市、朝倉市）に離れている農地の集約が課題です。また、農地については、集約後、5haまでの規模拡大を目指しています。

松浦さんの構想はこれに止まりません。仕事で食品メーカーとも関わった経験を活かし、新たな会社

を立ち上げ、子どもに焦点を当てた、高栄養価で簡単に提供できる加工食品を製造したいと考えています。さらに、NPO法人福岡歴史研究会の理事も務める松浦さんは、かつて海外で農業の振興に貢献した福岡県出身者に続き、自らも有機農業（BLOF理論）の技術の海外展開を通じて海外の有機農業に貢献したいという構想を抱いています。

松浦さんがさらに活躍し、将来は海外にまで活動の幅を広げることで、有機農業の拡大も国内外で進むことが期待されます。

もっと聞いてみました！

Q. 各品目の栽培のノウハウはどうやって習得？

A. 品目ごとの栽培技術は、一人でもインターネット等を使って調べることはできますが、地域性を考慮するために周辺の畑を見て対応したりすると、後手になってしまうこともあります。こうしたこともあり、地元集落の方に聞くなどして試行錯誤しながら学んでいます。

あとは栽培してからの植物の表情の変化をよく観察することです。時期・気温などの変遷に応じた植物の変化を知ることによって、次期に向けての課題が明確になります。生き物を相手にする以上、観察なくして栽培技術の向上はないと考えます。

Q. AGSAについて思うことは？

A. AGSAでは土づくりを学ぶことはできても、品目別の詳細な栽培指導は行っていません。全ての品目は無理だと思いますが、株の仕立て方や種の間隔など、カリキュラム内外で作物別の栽培管理を学べる機会を提供できればより高い就農技術習得に繋がると思っています。



(写真は松浦ファーム提供)

Q. 周囲の生産者との関わりは？

A. 地域の方とは自分から積極的にコミュニケーションをとっています。わからないことは何でも地域の方に聞くようにしています。皆さん基本的に慣行栽培ですが、学ぶ姿勢を素直に出すことで、有機の土づくりにも理解を示してくださり、良い関係が築けていると感じます。

また、集落で月1回行われる高齢者の集いに声をかけてもらい、参加しています。久留米市の方では、農地がある地域（田主丸地区）をエリアとするJAに正組合員として加入しています。特にこちらのJAはオーガニックを推進しており理解もあるので有難いです。直売所の利用などJAと付き合いがあることで助かることは多いです。

Q. 就農2年目の出来栄は？

A. この冬のにんじんは、現在も収穫中ですが、3,000kg/10a程度(※)の収量を見込んでいます。2年目としては、形もきれいなものも多く悪くないと感じています。

昨年が初挑戦の水稻（ヒノヒカリ）の収量は、396kg(6.6俵)/10a(※)でした。水田を借りた時期の関係から、秋わらのすき込みはできなかったため、春に雑草をすき込んだものの、土壌内での有機物の分解は間に合っていなかったため、このような結果になったと考えています。また、初めて稲作を経験して、代かきによる均平作業の重要性を学びました。

※：統計データ（農林水産省）

福岡県の冬にんじん収量 2,280kg/10a（令和4年）
久留米市の水稻収量 517kg/10a（令和5年）